

Title	高野山見存藏經目錄(水原堯榮編, 森江書店發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.144(698)- 145(699)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0146">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0146</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 鎮魂傳

(伴信友著  
大岡山書店刊行)

いづれの民族の場合においてもさうであるやうに、古代日本人の文化の研究においても、宗教が重要な位置を占めるのであるが、殊に彼等の宗教において魂に關する觀念を知ることが極めて大切である。魂の作用、はたらき、それに對する人間の對應的努力が重要な神事となるのであつて、鎮魂のごさきもその一つであつた。『鎮魂の法は、もろ饒速日命天降の時、天御祖神、十種の瑞寶を賜ひ、人の魂の運き、離遊るゝ事のあるを、云々して、神たちに請祈て、身體の中の府に鎮めて、齡を長からしむる御教の、禁厭法なるを、宇摩志麻治命の受傳へて、神武天皇の奉爲に仕奉りけるを始にて、御世々々仕奉るべく、詔おかせ給へるいさも尊き神事になむありける。』さて本書はこの鎮魂に關する故實の傳であつて、伴信友の七十三歳の時弘化二年の著述であり、前人未到の研究といはれるものである。また別に附録として、鎮魂に關係ある同氏の二著述、美多萬乃布由と宇加都志麻、並びに古事類苑の鎮魂祭の條目が採録されてゐる。前號において紹介したる『高橋氏文考注』の校訂者横山重氏の校訂によつて、この名著が新に刊行されたことは、古代研究者にとつてよるこばしきことであり、こゝに校訂者の勞を多とせねばならない。(松本芳夫)

## 高野山見存藏經目錄

(水原堯榮編  
森江書店發行)

峰巒累積たる高野山王國に、千有餘年間秘藏の萬寶中、秀衡經・

荒河經・宋藏・麗藏の四種が略ぼ完全に遺存されて居る事は、確に野山の誇の一である。今次、野山隨一の學僧水原堯榮僧正の手に依つて、右の四藏經の現存目錄と其れが野山に寄進より佚亡現存の狀に至る史實を併記した一〇〇〇頁の大書が公刊せられた。次に右の四藏經沿革を摘録する。

秀衡經は中尊寺經と同様で從來承安二年奥州文化の恩人藤原秀衡の寄進にかゝると謂はれて、其の名を附せられて居るが、近來の調査に依るとこの來歴は疑はしく、編者は豊臣秀次が平泉の大藏經や金澤文庫足利學校より書籍を收藏した史實や野山の木食上人と秀次との關係より推考して、秀次と木食上人の間に於て高野山に奉納されたものでなからうか、殊に秀衡經藏が木食上人開山本願の興山寺東照宮境域にあつた事實があり、彼の弘法大師風信狀の一通が木食上人を介して秀次が献納せしめたといふ史實もあることだから、それこれ思ひ合はす秀衡が寄進したと傳ふる承安二年の寄進狀が益々あやしくなつてくること云はれて居る。野山現存のものは三九八三卷で、この外、觀心寺等に散存のものを合すると四二〇二卷となる。

荒河經は美福門院經とも云はれ、鳥羽法皇の寵后美福門院得子が、法皇崩後、平治元年七月御善提のため、且つは御自身の滅罪生善を併せて御發願になつた紺紙金泥一切經書寫の願經で、元々は其の御隱栖地なる紀伊國荒川莊尼ヶ岡大殿臺十二伽藍地にあつたものと思はれ、それは同地現存藏經址の礎石と傳ふるもの、又菊花紋古瓦の遺存等に依つて立證されることである。門院の應保元年崩後、御遺命に依つて大師入定の靈域に移されたものと考へ

られ、又野山移入最初の地は寶藏院谷で、後、天正十八年木食上人に依つて伽藍地に移された。現在は御影堂寶藏に收められ、三五九卷存する云ふ。因に門院は法皇の御冥福を御自身前半生の奔放たる御生活を衷心悔ひ給ひ、又その罪を恐れて、後半生に於ける野山に對する御信仰は格別なるもので、女身なる故に禁制は犯されず、山麓の尼ヶ岡へ庵室を結ばれて、朝夕に大師の廟所を遙拜せられたのである。崩御は御遺旨に依つて御遺骨を野山往牛院谷菩提心院に收められた。これ今日の高野山陵である。

宋經は壽永三年冬、仁和寺宮道助法親王御灌頂の時、行勝上人止雨の法を修し法驗新なるものがあり、其の褒賞としてこの宋藏を下賜せられ、上人は之れを信仰の天野社頭に奉納し維新神佛分離の際其の受難の御蔭で野山に運ばれ勸學院の經庫に儲藏せらるゝに至り、三七四四卷を現存し、其の中三二四〇卷は福州本で、野山塔中分散のものを合すると三八五四卷に達する。

高麗藏は其の國寶の經庫と共に寄進に就いて異論されるも、其の經藏の慶長四年三月の額銘に依つて、石田三成が先妣の爲め木食上人を本願と仰いで寄進造營したことは明であり、六二八一卷を現存して居る。

猶ほ編者が大正十二年二月、美福門院の御隱栖地を訪ねし調査紀行「美福門院の舊蹟を索ねて」の麗文は荒河經の由來を物語り、これにより筆者が門院御隱栖地と御火葬塚と覺ぼしき所の存するを知り得たことを欣びとする。

又「秀衡經と荒河經の構圖と趣向」「宋藏と麗藏の構造と趣向に」「散佚せる藏經」「寶壽院藏經の經由に於て」の諸章に於て夫々記述

せられて居る。

目錄は秀衡荒河兩經は、函號・經目・卷次・缺卷次・卷數を、宋藏は函號・經名・譯者・冊目・缺冊次・冊數・刀・印造・摘要に分け、麗藏は函號・經名・冊目・冊數・刊年・刀・摘要に分けて列記し、各終尾に奥書を集録して居る。猶ほ本書の巻尾に五十音排列の目錄索引を附するなど頗る用意周到なるものがある。

以上は本書大要の紹介であるが、編者が佛事勤仕の暇に、かゝる大編を學界に提供せられし努力に對しては、たゞ「敬謝感激の外はない。本書の藏經研究者に多大の裨益を與ふることは勿論の事で又高野山學の研究を誘發せしむる導火線たることは筆者の信じて疑はざる處である。引續き上梓せらるゝ高野山學志第三編に於ては如何なる學界驚異のものが提出せられるか、其の早きを鶴首して居る次第である。(昭和六、一〇、二〇、夜武田勝藏記)」

### 實隆公記

(伯爵三條西家藏版)

實隆公記は、即ち前内大臣贈從一位三條西實隆公の日記にして、公二十歳文明六年より八十二歳天文五年其の薨去の前年に及び、まゝ殘闕あるも、前後六十有二年に亘つて居る。公の生涯は應仁文明の大亂より皇室式微時代に當つて、其の間寢食を忘れ心血を注いで皇室の再興を謀り、殊に延期に延期を重ねたる後柏原天皇の御即位の御儀を行はれしは、全く公一人の勳勞と稱せるも過言でない。公致仕の後、落飾して道號を耕隱、號を逍遙院、法名を堯空と稱せられた。公この前後、忙中能く寸閑を得て、和漢の學